

## モスクワの都市地理

—ソ連都市の代表として—

坂 口 良 昭 (香大)

「1976年の夏、国際地理学会がモスクワを中心に開催され、数千人に及ぶ各国地理学者が集まった。多数の日本人学者も参加したが、その一人として筆者もモスクワに10日間、シルクロードの中央アジア南部に10日間、計約20日間の滞在をした。

短い滞在であったが、幸い日本語の達者なソ連科学アカデミー研究員・経済地理学者のミハイル・クルビアンコ氏の終始手厚い案内を受けたので予想以上に多くのものを得ることができた。今回はソ連都市の代表としてのモスクワ市について紹介したい。次回シルクロード地域の紹介を考えている。」

[序]モスクワ市は18世紀ペテルブルグ(現レニングラード)へ遷都するまで、ロシアの古い首都であった。そして、200年ぶりに1918年3月レーニンの率いる革命政府が再びモスクワを首都と定めた。しかし、1930年頃モスクワを訪ねたアンドレ ジードの言によると「レニングラードは美しいがモスクワは醜い」とある。当時のモスクワは街路の91%が砂利道で狭く曲りくねっていたという。

しかし、今はそれを想像することも出来ない程、清潔で見事な町並に生まれ変わっている。多分、都市計画的にみて、世界でもっとも整備された都市といえよう。土地が国有化され、建物がほとんど公有で、しかも中央集権体制であるから、都市のフィジカルプランニングは全く教科書通りに実施できるわけである。都市計画の理論と実際がこれほど見事に一致している都市も少ないであろう。ただし、フィジカルな住み易さがただちにメンタルな住み易さとイコールでないことは言うまでもない。

よくソ連の都市を「くらし型の都市」というが、くらしのための生活基盤造りという点では世界に比肩するものがないであろう。日本都市との差が余りに大きいので、参考にはしにくいですが、以下モスクワを例に概観してみたい。

---

本文中の図表類は特に断りのないものは以下の文献から引用したことを注記する。  
G. Loppo, A. Chikishev, A. Bekker, (1976) : Moscow • A Geographical Survey ;

## 〔1〕 ソ連都市の一般的特性\*

まず、ソ連都市の一般的性格を略記してみる。

## ⑦ 過大都市の否定、摩天楼街の否定。

上記2者ほどどちらも資本主義社会の矛盾の生みだしたもので、社会主義社会では否定されるべきものと考えられている。現在ソ連の都市人口率56.2% (1970)、100万都市が8都市にすぎない。モスクワの700万、レニングラードの362万が図抜けているが、他の6都市は100万人台である。国土の大きさ、人口、経済の規模からみて、都市化率の低さ、大都市の少なさが特色である。

700万モスクワも巨大であるが過大ではない。ニューヨーク、東京、ロンドンなどの過大性とは無縁である。

摩天楼も独占資本のシンボルとして発達した性格が強いので否定するわけだが、しかし市街地の高度利用という合理性からみて高層建築はモスクワでもどんどん取り入れている。モスクワ大学の32階をはじめ、30階台の高層ビルがいくつか目に入る。

しかし、ニューヨークのような100階以上もの超高層はみられないし、また都心より周辺部に高層建物が散在しており、機能も大学、ホテル、アパート、官庁など地味なものである。ネオン輝くアメリカの摩天楼街とは異質である。

## ④ 農工生産都市、都鄙格差の解消

資本主義都市で高い第3次産業のウェートがソ連都市では低い。商業都市、保養都市のような純粋な消費都市は2~3の例外を除いて極めて少ない。モスクワのような大都市でも商業サービス人口は極端に少ない。そのかわり、中小規模の生産機能都市が卓越する。コンビナートを構成する工業都市群の外、農業都市の考えも強い。コルフォーズ、ソフォーズの集団農場を基に、その中心集落に都市計画手法をもち込んで、農業を基盤とする農民都市を造り農村の生活レベルを都市並に高めようとする計画である。都市、農村の生活格差は洋の東西を問わず永遠の問題である。ソ連でも農民の生活レベルは必ずしも高くない。コルフォーズは独立採算であるから、コルフォーズ間に貧富の差があるが

\*坂口良昭 (1976) : 世界の都市、日本の都市を参照のこと。

一般に都市労働者に比べ給与が大幅に低い。かつ労働の性質からもくるが、居住条件（空調設備、給湯施設、文化的・衛生的施設等）も悪いのが実情である。それらの改善を目指して農業都市案が実験的に進められている。

全国的に分散するコンビナートの造成も全国の経済水準格差の是正が国防目的とともに一つの大きな目標であった。ソ連のような広大な国土では完全な地域格差解消は不可能に近いが、そのための努力と成果は注目に値する。

#### ㊦ 都心機能の単純性とさかり場性の欠如

商業・娯楽などのサービス産業が弱体のため当然ながら、いわゆる「さかり場」というものがない。大きなソ連都市に必ずみられる娯楽機関は常設サーカス場、映画館、各種劇場、音楽会場等である。しかもそれらは必ずしも都心に集っていない。郊外に分散立地しているのが普通である。ホテルにはバーやダンスパーティーが開かれるが、ホステスはいない。日本流の低俗な遊び場や風俗営業がないということである。

したがって、都心は単純で殺風景である。大小のクレムリンやソビエトなどの官庁街と広場、それに博物館やせいぜい劇場、文化の家、それにアパート群といったところである。モスクワですら夏観光客が集まるだけで、普段は都心や赤の広場も閑散たるものである。そのかわりさかり場特有の犯罪も少ない。

#### ㊧ 社会施設の平等性とスラムの否定

資本主義社会特有の高級・中級・下層などの住宅街の区別はない。私有住宅や分譲マンションもあるが数は少ない。大部分は公営住宅であるから、割り当てられたところに住む。主に家族数に応じて割り当てられるので、隣近所は雑多な職業の寄り合い世帯となる。職業の上・下などは問題にならない。そういう近所とのつきあいを嫌うインテリ階層などが分譲マンションを買うわけだが、モスクワの都心でも日本円で400万円前後で買えるのであるから、我々からみたらずいぶん安い。しかし、もともと公営アパートの家賃が収入に応じて極めて低く押えられているのと、購入しても財産として世襲できるわけではないので、希望者は多くないようだ。

ただ、アカデミシャンなどの高度な学者達は高層アパートなど特権的アパートに住んでいるし、政府高官達も保安上のためか特別地区に居住している。

その他公共施設はすべて市民に平等に解放されていることは言うまでもない。

#### ④ 民族文化の尊重と都市計画

ソ連は多民族国家の典型である。15の主要民族にはそれぞれ共和国体制を認めており、それら15の共和国の連邦組織がソ連邦である。その下にさらに、自治共和国、自治州、民族管区などを区分して民族ごとのある程度の自治を認めている。現在、20の自治共和国、8の自治州、10の民族管区がある。このように民族ごとの独自性を尊重する考えがあるので、都市造りに際しても民族固有の文化をできるだけ生かす方針が貫徹されている。例えば先年、大地震で崩壊したタシケントの復興ぶりを現地に見たが、それは見事である。一つ一つの建物の形態、デザイン、壁面の模様をいたるまで、ウズベキスタン固有の文化を打ち出そうと努めている。

## 〔2〕 モスクワの概観

### (A) 人文的側面

第1図の示すようにモスクワ市は南北にやや長い円型自動車道に取り巻かれた市域である。面積879km<sup>2</sup>、東京都の区部の1.5倍の面積で意外に狭い。人口は第1表のように1974年で約736万人。人口密度8,370人/km<sup>2</sup>、東京都の人口密度8,636人/km<sup>2</sup>とほぼ同じで案外と高密度都市である。しかし、第2表の示す通り、公共緑地帯が24,000haもしめており、1人当たり35m<sup>2</sup>もあるのに対し、東

(第1表) モスクワ市人口推移 (千人)

年	当該年のモスクワ市域内人口	郊外部人口	現モスクワ市域内人口
1926	2,026	155	2,181
1939	4,136	404	4,536
1959	5,046	963	6,009
1970	6,942	—	6,942
1974	7,368	—	7,368

(第2表) モスクワ市生活条件の推移

	1940	1960	1970
総有効床面積 (百万㎡)	28.2	59.7	95.3
1人当たり有効床面積 (㎡)	6.8	9.7	13.7
公共緑地 (千ha)	4.3	13.6	24.2
1人当たり緑地面積 (㎡)	11.5	22.6	35
都市ガス (百万㎡)	164	5,878	12,442
商業販売額 (百万ルーブル)	2,125	6,054	10,612

京都が1.15㎡にすぎない。もちろん、道路も圧倒的にモスクワが広くゆったりとしている。その上、表のごとく居住面積も30年間に3倍強に増え、一人当たり13.7㎡という豊かさである。この違いはどこから来るのであろうか。言うまでもなく市街地の立体化の徹底である。モスクワ市内には一戸建の家は一戸も認められていない。

モスクワを一口でいえば、全市が一大アパート団地といえよう。周辺は言うに及ばず、都心の目抜き通り沿線にも巨大なアパート集団が他の建物を圧して卓越しているさまは異様ですらある。資本主義都市におけるような私的企業のビルがないせいである。

また職業構成を第3表でみると、製造業人口比が30.2%と非常に高く、しかも1960年には36.4%もあったことがわかる。モスクワは立派な工業都市である。一方、商業人口比はわずか8.1%にすぎない。東京の24.3%、高松の31.6%と比べて異常に少ない。このように生産の優位、商業サービスの軽視がモスクワのような大都市でも認めら

(第3表) モスクワ市産業別人口構成 (パーセント)

	1960	1970
製造業	36.4	30.2
運輸通信業	10.3	9.4
建設業	10.2	9.6
商業	7.1	8.1
住宅サービス業	5.7	5.0
保健・体育・社会保障職	4.4	5.0
文化・教育職	5.3	6.0
科学研究職	12.4	17.6
行政職	3.2	4.7
その他	5.0	4.4
計	100.0	100.0

れるわけである。もう一つは科学研究職が17.6%と第2位を占めていることで、さらに文化教育職が6.0%で、合わせると23.6%もあることである。これは高等教育機関や研究機関のモスクワ集中を物語っている。各種科学アカデミー所属の巨大な研究機関やその他の各種の研究機関がモスクワ市に集中していること、博物館、資料館の数の多いこと、また、レーニン岡にそびえるモスクワ大学（学生数2.5万人、教官数2,000人余）をはじめ、各種高等教育機関が77もあり、通信学生も含めるとその学生総数61.7万人に達し、大学院生数も3.3万人もいるというモスクワの現況を考えると、このような職業構成も理解できよう。

(B) 自然的側面

モスクワ市は全体に氷河地形のゆるやかな丘陵にのっている。第1図をみて



第1図 モスクワ市道路網と土地利用, および地形区分 (E. D. SMIRNOVA)

みよう。モスクワ市および郊外部の状態であるがまず、一番外側の環状道路内が市域である。そして交差斜線の部分が建物充てん部分を示す。樹木記号の部分が公園緑地を、点状記号が畑を示す。市街地がやはりアミーバー状に伸びて、その中間に緑地が凸出的に介在している。

この図を太い線で3区分してある。「第1区分」は西北部で「北部モレーン地区」に当たる。モレーンとは氷河堆積物が丘陵列を造っている地形で、都心のクレムリンの岡がその南端に当たる。平均的に160mから200mの高度のゆるやかな丘陵で植物園をはじめ、公園も多く、白樺、モミ、ナラ、カシの美林が豊富で美しい。シェレメティエボ国際空港への道はこの白樺林を突切っていくので大変美しい。

「第2区分」は市街南半部にあたり、同じく160~200mのゆるやかな丘陵地形であるが、数多くの谷が刻んでいる。最も美しく有名なのはレーニン岡で、都心の南西、モスクワ川の曲流の攻撃斜面上にある200mの岡でモスクワ大学がそびえ、モスクワ全市を一望にすることができる。この一帯は大学や研究所の外に常設サーカス会場、ピオニール宮殿などが集まり、一つの市中市を構成している。モミやナラの外にぼだい樹が繁茂していて、夏は緑に埋った感がする所である。南西部は近時大規模団地の開発が盛んである。

「第3区分」は東半部分で、モスクワ川や支流の沖積平野にあたる。高さ160mまでの砂質土で、松林が多いのが特色である。特にgの記号部分は旧皇室の猟場でモスクワ最大の自然林公園で、100年以上の大木が繁茂する。

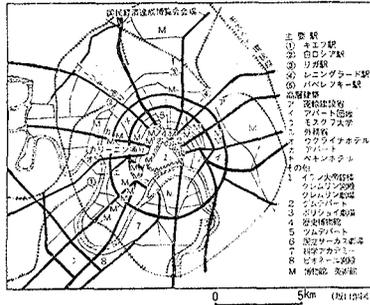
### 〔3〕モスクワ大改造計画

序で述べたように1930年までのモスクワは大きな田舎であった。このモスクワを全面的に再開発して、現在のモスクワに造り変えたのがモスクワ大改造計画である。その3本柱は、第1に地下鉄優先の陸上交通体系の完成、第2にモスクワ河から運河網整備により、白海、バルト海、黒海、カスピ海に通ずる水路網、第3に市域内の工場集積禁止令である。それに加えて、第2次大戦後の大規模住宅団地造成計画がある。

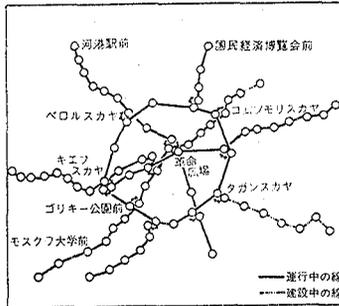
#### (A) 交通体系の整備

モスクワで羨ましいものの第1は、水陸空の交通体系の見事な有機的統合性である。それに運賃の極端な安さである。

第2図A、Bの示す通り、道路、地下鉄、鉄道すべてが環状放射の典型的パ



A モスクワ陸上交通網



B モスクワ地下鉄網

第2図 モスクワ交通網 (坂口 原図)

ターンを示している。国内主要駅からの11本の幹線鉄道はすべて都心外側をとり巻く環状地下鉄と結合し、都心へは放射状地下鉄で進入するようになっている。面白いのは駅名が行先地名で呼ばれていて、カザン駅、レニングラード駅、キエフ駅、白ロシア駅などがモスクワ市内にあることである。東京駅のような都心型鉄道駅は存在しないので、都心地区の地表部はゆったりしている。地下鉄駅はその豪華さで名高いが、帝室用の装飾技術を人民大衆に開放するという意味をこめて造られたもので、現在地下鉄駅の見物巡りという観光コースがあるくらい豪華なものである。その上、スピードと安全性、安価性が加わる

ので大衆の乗物として完全である。料金は5カペイカ(20円)均一で全線乗れる。1日の利用客300万人以上だがラッシュのはげしきはない。市域内のどの団地からでも地下鉄が利用でき、都心まで15分程で到着できるので、遠距離通勤客は一部市外の衛星都市の者を除いて存在しない。

道路網も都心を取り巻く2本の環状道路と市の境界をなす外環状道路の3本に、13本の主要放射道路が伸びる。道路は最底25m、大通りは50mから100m幅をもち直線状でゴーストツブは少ない。一般に並木は見事で数列の樹木列からなる。現在のところモスクワ市内に自動車は各種合わせてわずか40万台、自家用車は7,000台にすぎない。東京は乗用車のみで156万台にのぼる。したがって、自動車天国の状態である。交通渋滞は格別の道路工事箇所以外にはないといえる。環状道路→放射道路→一般道路→生活道の順で道路は有機的に結ばれ交通量が分散する。

一方、市街地の地上の大量交通機関はバス、トロリーバス、市電が発達していて、料金は4カペイカである。空港は5つあり、国内、国外からの300本以上の航空路線が集中しているが、それにもかかわらずモスクワ上空を飛ぶ旅客機は見られない。5つの空港はいずれもグリーンベルト内外に市街を遠くはずれて散在しているので騒音問題はない。最も有名なのは北西方のシェレメティエヴォ国際空港で、国内用では東南方のドモデドヴォ空港が名高い。ただし、空港間の距離が遠いので乗り変えが大変である。

水運は前述の通り、白海、バルト海、黒海と南北いずれの外洋とも結ばれていて、モスクワはその意味で国際的河港である。

#### (B) ミクロライオン計画と住宅団地造り

ミクロライオン計画とは日本の近隣住区計画、あるいはこの頃はやりのコミュニティ造りに相当する語であるが、ソ連の場合は教科書通り、理論通りに実行されているところが違う。住宅地域に適正規模ごとに幼稚園、小学校、中・高等学校を設け、低学年用の学校は自動車道を横切ることなく歩いて15分以内の範囲ごとに設けられる。また、規模に応じて遊び場から小公園、大公園が配置され、ショッピング施設、病院、保育所、集会所などの公共サービス施設やレクリエーション施設が規準通りに配置されるわけで、日常の生活がその範囲

内で一応完結できる地域社会造りである。したがって、団地が出来ると入居早々から生活上の利便は確保されているわけである。ソ連都市を訪ねて様に誰もが驚嘆するのはそのすさまじいばかりの大量のアパート造りであるが、同時に入居者のための細かい生活上の施設が完備していることである。モスクワで現在進んでいる最大の団地造りは都心からわずか地下鉄で25分の西南部にあたり、社会主義社会の集中投資の偉力をまざまざと見せつけている。

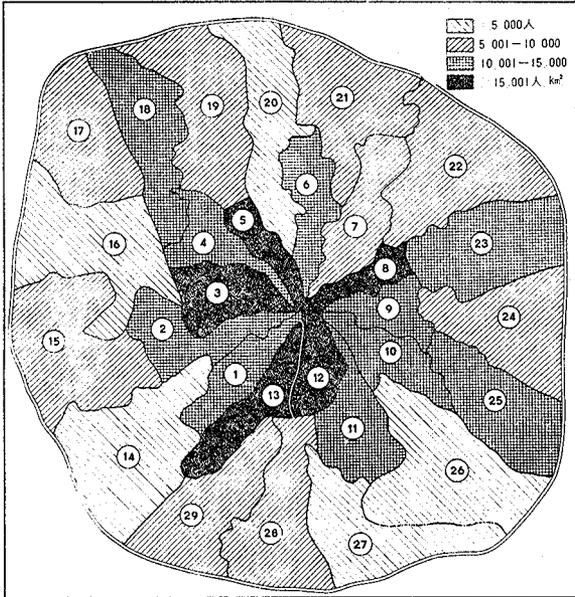
#### (C) カリーニン通り

最近のモスクワ再開発事業の代表例がカリーニン通りである。従来のカリーニン通りは平凡な大通りであったが、それを幅員250mに拡張し、全長800mにわたって見違えるような高層ビルの並ぶモダンな通りと化した。北側は6,000人収容力をもつ27階建高層アパート4棟が並び、南側は800mの長さのショッピングストリートで、前面に40m幅の遊歩道を設けている。外観的にも従来のモスクワの景観とは全く異質で、アメリカ都市を部分的に移植した感があり、一部ソ連識者には不評であるが、一面からいえば重苦しい、モスクワの景観の上にガラスのビルが林立するさまはユニークである。ともかく、このような大規模な再開発を短時間で実現するソ連の都市改造の強引さには驚嘆するものである。

#### 〔4〕 機能的地域構造の特色

都市の機能的地域分化理論では、アメリカのパージェス教授の同心円理論が有名である。その後、多核心理論、扇形理論等いろいろな考え方が考案されたが、根本的には同心円理論に帰着するようだ。ところが、社会主義国の都市にはこの同心円理論は適応できないように思われる。一応、次に述べるように都心部、中間部、外縁部の3地帯に区分できるが、いろいろな点でアメリカの事例とかけはなれている。都心の機能がまるで違うことはすでに述べたが、官庁街の外はビジネスオフィス街、金融・証券街、中心商店街、娯楽街、風俗営業街などの構成要素が殆どみられないで、かわりに博物館、資料館、図書館等の文化施設が幅をきかせており、同時にアパート街が卓越していることが特色である。

第3図のようにモスクワの人口密度図は都心部が最も高く、周辺程低くなっていて、いわゆるドーナツ現象というものが資本主義国程顕著でない。職住近接の典型的例といえよう。



1 Leninsky 13.2	11 Ploshchinsky 11.6	21 Babushkinsky 8.2
2 Kiyevsky 11.8	12 Moskovortsky 18.2	22 Kuybyshevsky 6.2
3 Krasnopresnensky 16.9	13 Oktyabrsky 20.1	23 Pervomaisky 11.6
4 Frunzensky 14.2	14 Gagarinsky 4.1	24 Perovsky 8.1
5 Sverdlovsky 22.7	15 Kuntsevsky 6.9	25 Volgogradsky 10.5
6 Dzerzhinsky 12.7	16 Voroshilovsky 5.4	26 Lyublinsky 3.0
7 Sokolnichesky 7.5	17 Iushinsky 6.9	27 Krasnogvardeisky 4.5
8 Baumansky 22.9	18 Leningradsky 12.6	28 Sovitsky 5.2
9 Kalininsky 11.6	19 Timiryazevsky 9.1	29 Chervomushkinsky 6.6
10 Zhdanovsky 12.2	20 Kirovsky 4.8	

第3図 モスクワ市人口密度図

また、第2帯の漸移帯といわれるスラム・ゾーンがないことも言うまでもない。第3帯の高級アパートゾーンもない。市の外側の通勤者ゾーンといわれる郊外のスプロール現象もない。

ともかく、巨大都市のわりにコンパクトにまとまっていて、はっきりしたバージェス流の機能的地域分化はしていないといえよう。

(A) 都心部——サドボイア環状道路内を指す。17世紀までのモスクワ市域に相当し、最も古いセクションで、クレムリン（要塞の意）が中心にある。革命以後の再開発が大規模に行なわれた部分で面目を一新した。もちろん、保存と

開発の調和が最重点施策で、現在も由緒ある古い建物は寺院も含めてすべて完全に保存され観光名所となっている。また裏通りに入ると、古いアパート街も良く残っており都心とは思えない落ち着いた雰囲気をもっている。

しかし、大通りを中心に道路は大改造され拡幅、直線化、広場造りが進められ、それに伴って表通りの建物も大改築され、高層近代化し、党はじめ各種の公共機関やホテルになったものが多い。また、ゴリキー通りのような商店街は1, 2階の商店部分を除くと上層階はすべてアパートとなっている。したがって都心といえども夜間人口が多いわけでドーナツ化傾向は低い。ただし、近時裏通りの古いアパートを再開発してホテルなどに改造しているので、人口は漸減中である。世界最大といわれる6,000室持つロシアホテルもその例で、当地区の人口は一挙にゼロとなった。娯楽機関はボリショイ劇場、マリー劇場、中央児童劇場などのような高級な劇場がガスベルドロフ広場に集中している。また都心にはコンセルバトワールなどのコンサートホール、それに大映画館などが集中している。

モスクワの都心再開発は一言にいえばクレムリン アンサンブルの眺望をよりひきたてるよう、かつ周囲から大衆が接近しやすいように進められてきたといえよう。ロシアホテルの頂上から見下ろすクレムリン、赤の広場一帯の景観は確かに見事な迫力がある。

(B) 中間帯——1960年までの市域に相当する。ほぼ中環状道路の範囲で、東部および東南部のモスクワ川下流とその支流ヤウザ川に沿って工業地帯が展開する。また国内幹線鉄道の終着駅と環状地下鉄駅との結合ターミナルが9ヶ所分布する地帯である。革命以前、あるいはその後も再開発の進む前まではモスクワのスラム地帯がこの工業地区の労働者街であった。ヨーロッパ都市のスラムは市の東側に多く発達しているが、モスクワもその例にもれなかったわけだ。やはり偏西風帯の影響かもしれない。

1960年代になって労働者街も再開発され立派になったが、やはり西側の住宅街に比べると緑が少なく見劣りがする地域である。

工業は軽工業もあるが、金属、自動車など重工業が意外と盛んである。ただし、モスクワ市内での工場の増設は禁ぜられているので最近では郊外一帯に工業

衛星都市が数多く発達して、モスクワコンビナートを形成している。

同時に鉄道駅と地下鉄駅のジャンクションポイントの整備も重要で、駅前広場造り、パスターミナルの造設、一部ターミナルではモスクワ川の乗船場も付加した水陸両用ターミナル造りが進められている。モスクワ川西側にはモスクワ大学はじめ美しい住宅街が開かれている。

(C) 外縁帯——1960年にモスクワ市域へ合併された地帯で、外環状自動車線の範囲内に包含されている。中心から短径15Km、長径18Kmの半径をもつ長円径をなす。この一帯は新興アパート団地群からなり、緑は豊富で道路も整備され、マイクロイオン計画も完全な実施をみている地区で、素晴らしい団地型住居地帯といえる。全体に西側の住宅化が顕著でまた見事である。

従来この地区には一戸建家屋が数多く残っていたが、すべて高層アパートに再開発された。大合併の1960年以後に建設されたアパート群にモスクワ人口の54%が収容されているという。一方、1918年以前、革命以前からの古いアパート（主に都心部に残存）の居住人口は11.5%となっていて漸減中である。これら郊外の高層アパート団地には公営のものが大部分であるが、一部には分譲アパートもあり希望者は400万円程度の価格で購入私有化もできる。

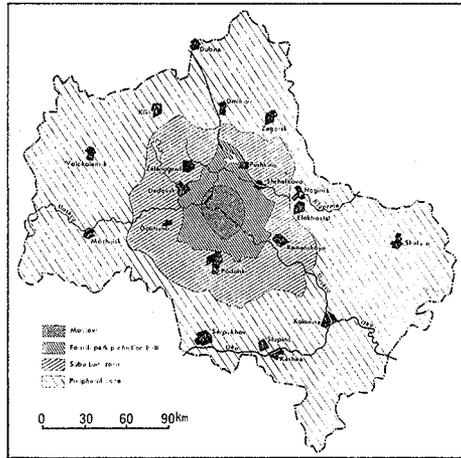
公営の欠点の一つは、自分の意志に反しても、時に他の居住地を割り当てられるからで、例えば、子供が独立して老夫婦だけになると狭いアパートへ転住させられるなどの不満がある。

外縁部の住宅化といっても都心からの平均距離はわずか14Kmにすぎない。地下鉄を利用すれば、通勤、通学、買物時間は問題にならない。しかし1960～70年の間に地下鉄利用客数の伸びは62%に達している。そこで長期的にみると、この新興住宅地区にも多くの職場を分散させ、職住近接を果さねばならない。そこで各種工場、研究所、大学などがその地帯に新設されているわけである。

また商店についても、都心にかたよっていたのをいくつかの新しい百貨店を作って、周辺に分散させている。都心のグム、ツムなどのクラシックな百貨店に比べ、周辺の新しい百貨店はスマートなガラスのビルである。しかし、中の様子は日本の二流のスーパー程にも洗練されていないのは止むをえない。

〔5〕 モスクワ首都圏——郊外衛星都市群——

第4図が示しているのがモスクワリージョンの範囲で、中心のモスクワ市の周囲に幅10～15Kmの一大グリーンベルトとしての森林保護地区が取り巻いてい



第4図 大モスクワ圏

る。この一帯は素晴らしいレクリエーション地帯で、美しい緑の中に、中・小のゴルフコースが点在したり、公園・サナトリウムも点々としてみられる。このグリーンベルトの外側に7つの衛星都市とその他多くの町やゴルフコースがあるが、これらの市からはモスクワまで約50万人以上の通勤通学者がみられる。日本のいうベッドタウン的色彩が強い。もちろん、各種の研究施設、実験施設などが存在する研究都市も多い。また、国際、国内空港4つもこのベルト内に分布する。このサブバンプゾーンの外側に首都圏外縁部の衛星都市が13市、ならびに多数の町やゴルフコースがみられる。ここの都市は主に工業衛星都市で軽工業から重工業にいたる各種工業が発達していて、モスクワコンビナートの主部をなす。同時に、この地帯はモスクワの近郊園芸農業地帯をも構成し、また、史跡の分布も多く、郊外レクリエーション地帯でもある。

21世紀の大モスクワ計画ではこのモスクワリージョン全体をカバーする一大都市コンプレックスが実現する予定である。

日本首都圏構想に相当するものであるが紙面の関係で詳細は省略する。